



誠命と定規

五 エダヤの王へ口テの時アビア組の祭司

に、サカリアといふ人あり。其妻はアロニの裔に

て名をエリサベツといふ。二人おから神の前

に、義しくして、主の誠命と定規を、みな欠なく行

へり。エリサベツ石女なれば、彼らに子なし。ま

八 二人とも年邁みぬ。サテサカリアその組

丸 の順番に當りて、神の前に祭司の務を行ふ時、

九 祭司の慣例に従ひて、籤を抽き主の聖所に入り

十 て、香を焼くこととなりぬ。香を焼く時民の群

中

務

別行

懼 おそ  
懼 おそ

喜 よろこ  
悦 よろこ  
歡 よろこ  
樂 よろこ  
十五

十一

十二

十三

十四

十六

十七

皆外みよにありて祈いのりぬたり。時ときに主しゆの僕つかひあは

れて、香かう壇だんの右みぎに立たちたれば、ガカリガえを見み

て、心こころ騷さわが懼おそを生しやうず。御使みつかひいふサカリアよ懼おそる

な。汝おんぢの願ねがひは聽きかれたり。汝おんぢの專つまエリサベフ田あ子んし

を生うまん。汝おんぢ其その名なをヨハネと名なづくべし。汝おんぢ

に喜よろこと樂たのしみとあらん。また多おほくの人ひともその生うまる

も喜よろこぶべし。この子こ主しゆの前まへに大おほくうん。また葡ぶ

萄たう酒しゆと濃こき酒しやとを飲のます。母はの胎たいを出いづるや聖せい靈れい

に満みたみ井いされん。又また多おほくのイスラエルいの子こら

主しゆある彼かれらの神かみに歸かへらしめ、かフエリヤの靈れい

聖書改譯原稿用紙

懼

據りて

十八

十九

廿

廿一

と能力とももて、主の前まへに往ゆかん。これ父ちちの心こころを  
 子こに、房ふさゆる者ものを、義人ぎじんの聰明ちやうめいに歸かへらせ、整ととのへた  
 民たみを主しゆの爲ために備そびへんとてなり。ザカリヤザカリヤ御み  
 使つかひに言いふ、何なにに據よりてか、此この事ことあるを、知しらん。わ  
 ぬは、老人としよりにて、事こともまた、年とし邁すすみたり。御使みつかひこた  
 へて言いふ、われは神かみの侍みまへ前に立たつが、バリエルバリエルな  
 り。汝なんぢに語かたりて、この喜よかき音おとづれ信しんを告つげん、爲ために遣つかはさ  
 る。視みよ、時ときいたらば、必かならず遂しげげらるべし、我われが言ことば  
 を信しんぜぬに、因より、なんぢ黙しんして、此こらの事ことの成なる  
 日ひまで、は物ものいふこと、能あたはじ。民たみは、かカリ、アを

大

座位

借に在り  
子監督書面

世 世 世

候 ちみ て、其の宮の内に久しく留まるを怪しむ。  
 遂に出でて来きりたれど物言ふこと能は有らば彼  
 うその宮の内にて異象を見みたる事を曉さる。サカ  
 リアは、たゞ首にて示しめすのみ、なほ、無なりき。  
 く、て務の日に満ちたは、家に歸かへりぬ。此の後にそ  
 の專つまエリサベツツ子みて五月に隠かくれをりて言い  
 ふ。主しゆが耻はぢを人の中に雪すすがせんとして、我われを顧かへり  
 み給たまふ時ときは、斯かく為なし給たまふなり。  
 その六月に、御使みつかいがブリエル、ナガレトイ  
 ふが、リウヤの町まちにをる處ところの詩うたに、神かみより遣つかはす  
 る。此この處ところはガビテの家いへのヨセフトいふ人ひと  
 と許いひあつ嫁けせし者ものにて、其その名なをマリヤといふ。  
 使つかい處ところの許もとに來きたりて言いふ。めでたし、喜よろこぶ事ことと  
 よ。主しゆが心こころをかしと借とにいませ。マリヤの言ことばによ  
 りて、心こころいたく騒さわぎ、斯かくありて、如何いかなる事ことと  
 思おもひ廻めぐらしたるに、御使みつかいマリヤに懼おそるな。  
 汝なんぢは神かみの侍まへ前にめぐみをえ得えたり。視みよ、汝なんぢが子こみ、  
 子をう生うまん。其その名なをイエスと名なづくべし。  
 此こは大おほなる人ひと至高いとたか者ものの子こと稱とへられん。また主しゆ  
 なる神かみ、之これにその父ちちガビテの位くらゐをあげ給たまへば、

世 世

聖書改譯原稿用紙

候 ちみ て、其の宮の内に久しく留まるを怪しむ。  
 遂に出でて来きりたれど物言ふこと能は有らば彼  
 うその宮の内にて異象を見みたる事を曉さる。サカ  
 リアは、たゞ首にて示しめすのみ、なほ、無なりき。  
 く、て務の日に満ちたは、家に歸かへりぬ。此の後にそ  
 の專つまエリサベツツ子みて五月に隠かくれをりて言い  
 ふ。主しゆが耻はぢを人の中に雪すすがせんとして、我われを顧かへり  
 み給たまふ時ときは、斯かく為なし給たまふなり。  
 その六月に、御使みつかいがブリエル、ナガレトイ  
 ふが、リウヤの町まちにをる處ところの詩うたに、神かみより遣つかはす  
 る。此この處ところはガビテの家いへのヨセフトいふ人ひと  
 と許いひあつ嫁けせし者ものにて、其その名なをマリヤといふ。  
 使つかい處ところの許もとに來きたりて言いふ。めでたし、喜よろこぶ事ことと  
 よ。主しゆが心こころをかしと借とにいませ。マリヤの言ことばによ  
 りて、心こころいたく騒さわぎ、斯かくありて、如何いかなる事ことと  
 思おもひ廻めぐらしたるに、御使みつかいマリヤに懼おそるな。  
 汝なんぢは神かみの侍まへ前にめぐみをえ得えたり。視みよ、汝なんぢが子こみ、  
 子をう生うまん。其その名なをイエスと名なづくべし。  
 此こは大おほなる人ひと至高いとたか者ものの子こと稱とへられん。また主しゆ  
 なる神かみ、之これにその父ちちガビテの位くらゐをあげ給たまへば、

幸福

世三 ヤコブの家を永遠に治めんその國は終る  
 世四 ことなかるべしマリ御使に言ふ我未だ人  
 世五 を知らぬに如何して此の事のある可き御使  
 世六 こたへて言ふ聖靈なんぢに臨み至高者の能力  
 なる者は神の子と稱へらるべし。視よ、汝の親  
 族エリサベツも年老いたんど男子を乃子めり。  
 石女といはれたる者なるに、今は孕みてはや  
 六月になりぬ。それ神の言には能はぬ所なし  
 マリア言ふ視よ、われは主の婢女なり。汝の言  
 九 列の如く我に成れかし一つひに御使離れ去りぬ。  
 世十 その頃マリア立ちて山地に急ぎ往き、ユダの所  
 世十一 にいたり、ザカリアの家に入りてエリサベ  
 世十二 ツに挨拶せしに、エリサベツその挨拶を聞く  
 世十三 や、見は胎内にて躍れり。エリサベツ取生靈に  
 世十四 され、汝は祝福せられ、その胎の實も亦祝福せられ  
 世十五 汝は祝福せられ、その胎の實も亦祝福せられ  
 世十六 リ、わが主の母のあれに來るを我何によりて  
 世十七 が得し。視よ、なんぢの挨拶の聲わが耳に入る  
 世十八 や、我が見胎内にて喜び躍れり。信せし者は幸福

聖書改譯原稿用紙